第二節　「残躯天の赦さず所」

一時騒然となっていた校内は、昼休みの終わりを告げるチャイムとともに徐々に落ち着きを取り戻していった。
輸送機からコンテナが落下するのを目撃したのは、ごく少数の者のみである。

●――5時限目の授業（英語　三浦先生）

チャイムが鳴ると同時に、教室のドアを開けて【三浦泰人　3年B組担任　英語　演劇部顧問】が入って来た。合理性を追求する先生の性格をよく表している。
外国に対するあこがれが強く、ピンクや青色のYシャツを好んで着用。ややオーバーアクション気味なミドルガイ。グラマーが得意な一方、英会話は苦手だったりする。
「スタンダップ、バウ、シッダウン」
クラス委員長の石田の号令に従い起立、着席する生徒たち。
「エンド、スリープ……」と、昼食後の授業は眠いから寝ると決めこんだ上田の後ろで、マリは浮かない顔をしていた。
教壇の先生の言葉も耳に入らない。ため息ばかり出る。そんな調子……。思えば彼女にとってこんな気持ちは初めてだった。一言で言えばそれは失恋――。状況からして、明智はサトミとの交際を認めたように見えた。
マリの頭からサトミを抱く明智の姿が離れない。それを振り払おうと軽く頭を振っては、また深いため息をつく。
「お前さー、鼻息あらいわ」
気がつけば、上田が顔半分をマリに向けている。
「鼻息じゃないわよ……。ちょっと、考え事をしてただけ……」
頬杖をついて窓の外を眺めるようにつぶやいたマリ。その表情は明るいものではなかった。
そんなマリの様子に上田は複雑な表情を浮かべた。偶然にも上田は昼休みの終わりに校庭から校舎へ戻る際、明智とサトミが屋上のフェンスそばで寄り添う姿を目撃していた。
「……ところで、あれ、何だったんだろうな？　軍用機がここいらの上空を飛ぶなんて、今まで見たこともねえよな」
「そうね……」
マリは視線を窓の外から教壇の三浦先生へと移した。
「訓練にしても、あの高度は異常だったわ……」
三浦先生が英会話の一文を誰かに読ませようと見渡しているのに気づいたマリと上田は、すかさず教科書を読むふりをしてやり過ごす。
「アーハン。ミス　ホウジョウ　プリーズ」
三浦先生に使名されたマサミが慌てて教科書を手にして、今どのページなのか隣の席の上杉に尋ねる。
「リード　ネクスト　センテンス」

意地悪そうな顔つきで、マサミにプレッシャーをかける三浦先生。
「俺、外に居たからよく聞こえたんだけど、あの後、そこら中で消防車やらのサイレンが鳴ってたぜ」
「誰も怪我してないと、いいんだけど……」
不安そうな表情を浮かべたマリは、ふたたび街の外を眺めた。
「ヒ、ヒー　クッド　エスケープ　フローム　ゼアー　バッート。ヒー　セッド　アイ　アム　ゲイ」
「北条マサミさんは〝ゲイ〟だそうだ……」
平賀のつぶやきにクラス中が爆笑に包まれた。
「ＧＵＹだよ、ＧＡＹじゃないってばっ」と、上杉がマサミの誤りに慌てて助け舟を出す。
「うっせー、お前ら！」
マサミがクラス中に向けて怒鳴り散らすと、「オーマイガッ」と額に血管を浮き出させた三浦先生は首を振った。
「そう言えば前田くん、どこ行ったのかしら？」
クラスの騒ぎをよそに、マリは空席になっている前田の席を見つめた。
「保健室で昼寝でもしてんだろ。たく、あいつは何しに学校来てんだ？」
そう言って呆れた顔をしてみせる上田に、「あんたが言うか」とマリは心の中でつぶやいた。
その時、学校前の道路を、赤色灯を点けたパトカーがサイレンを鳴らしながら猛スピードで走って行くのが、教室から見えた。
窓側の生徒が一斉に外の方を向くと、その動作に他の生徒も窓の外を見ようと立ち上がった。
「アテンション　プリーズ！　ピーポー！」といちいち英語まじりで三浦先生が注意するまでもなく、すぐにパトカーは過ぎ去り、みんな窓の外を見るのをやめた。
マリが窓の外から机に視線を移した時、机の左上端に鉛筆で何か落書きがされているのに気づいた。光の反射でよく見えなかったその落書きはこう記されていた。
『真実は世界史の裏にある』
（どういう意味だろう？）
マリは首をひねりながら、誰がこんな落書きをしたのか考えた。
「竹中くん……？」
２時限目の授業で、この席に竹中みきおが座っていたことにマリは思い当たった。そして、またその意味について思いをめぐらせた。
その間も授業はいつも通り進み、まもなく終わりのチャイムが鳴ろうかという時、その事件は起きた――。
突然、廊下からバタバタと走っていく先生たちの足音が聞こえた。
「きっとお前を捕まえに来たんだぜ、上杉」といたずらな笑みを浮かべるマサミ。
「もう、そういうのいいから」と上杉。
校舎内の騒がしい様子に生徒たちが私語を始めた。その声で教室内が騒がしくなった。
「ビィー　クワイエット！　静かにしろ！」
三浦先生が声を荒げた時、ガラガラッと教室のドアが勢いよく開いた。２年Ａ組担任の藤原先生は軽く会釈すると中に入ってきた。
「オー！　ミス　フジワラ⁉　ホワット　ドゥ　ユー　ウォント？」

何だか少し嬉しそうな様子の三浦先生。それを無視するかのように三浦先生の問いには答えずに、藤原先生は生徒たちの方を向いて話し始めた。
「どうやら、校舎内に不審者が入ったようです。今、大岡先生たちが対処していますので、連絡があるまで教室から出ないように！」
藤原先生はドアを閉めると、すぐさま隣の教室へと早足で向かって行った。
「オー！　ミス……」
名残り惜しそうに藤原先生の背中を見送ると、三浦先生はすぐさま対生徒用の厳しい表情へと切り替え、今聞いた内容を繰り返した。
「リッスン！　エブリバディー。次の連絡があるまで、みんな教室でウェイト」
「イチイチ、うぜえ」
壁にもたれかかった上田がぼやく。
「それでは、このままネクストレッスンをします」
三浦先生はそう言って、人差し指で眼鏡を掛け直し電子パッドを開いた。
「えぇぇぇー」
予想外の提案にブーイングの嵐。その効果はなく、三浦先生が意に介する様子はない。
「だってもう、授業時間終わってるってばぁー」
マサミがその通る声で猛抗議をした時、ふたたびガラガラと音を立てて教室の前のドアが開いた。三浦先生がにこやかな笑顔で振り返る。しかし、ドアの前には三浦先生の期待を裏切り、見知らぬ男が立っていた。
「ホワッツ？」
男の息遣いは異常なほど荒く、目は血走り、黒目がち。死人のように青ざめた顔は、あふれんばかりの怒りの表情を湛えている。まるで般若の仮面を見るようだ。口元は口紅を塗ったようにべっとりと赤い色をしていた。血の赤だ。そして奥歯を噛みしめるあまり、ギリギリと不気味な歯ぎしりが鳴っている。
「キャーッ！」
ドア脇の席に座るヒデミが悲鳴を上げ、その声に反応した不審な男が彼女の方にサッと顔を向けて、犬歯を剥きださせた。
「フ、フーアーユー⁉」
誰かの冗談だと思った三浦先生が不審な男にズカズカと歩み寄り、不用心にも人差し指を男の胸に突き付けた。
次の瞬間、男がいきなり三浦先生に飛び掛かり先生の首筋に噛みついた。
「ぬうあおおおーッ！」
三浦先生は英語とも日本語ともつかない悲鳴を上げた。噛みつかれた首筋から血が滴り落ちる。先生から飛び散った血を見た女子生徒たちが一斉に悲鳴を上げた。
それを合図に前列に座る生徒たちが飛び上がり、我先にと教室の後ろへと逃げ始めた。その行動につられて教室中がパニック状態になり、生徒たちは一斉に教室後部の扉へ殺到した。窓を開けて廊下に飛び出す生徒もいる。
その中でマリと上田だけは、その状況を危険と判断して自分たちの席に留まっていた。
「キャッ」
押された女子生徒が窓にぶつかった衝撃で、廊下側の窓ガラスが割れた。

「落ち着け、落ち着くんだ！」
石田が大声で叫び、慌てふためくみんなに自制を求める。
「委員長！」
「石田くん‼」
上田とマリが驚愕の表情で叫ぶ姿を見た石田は、ふたりが指さす方向へ振り向いた。すると三浦先生を襲った正体不明の男が、今度は石田に襲いかかろうと目前まで迫って来ていた。
「うわっーー！」
不意を突かれた石田は後ろへと倒れ込んだ。なおも不気味な男が迫ってくる。石田は慌てて四つん這いになり、机の間を縫うようにしてマリたちの所へ逃げて来ると、藁をもつかむようにマリの両足にしがみついた。
「た、助けてくれーー！」
不気味な男はだらりと両手を突き出すと、口からシューシューと息を吐き出しながら、ふたりに襲いかかって来る。しかし、マリは石田が足にしがみついているため身動きが取れない。
「石田くん、離して──ッ！」
マリの首に不気味な男の両手が掴みかかろうとした寸前、
「うおぉぉぉ！」
上田は部活で使用しているバットを掴むと、そのまま思い切りフルスイング。不気味な男のこめかみを強打した。上田の一撃で男は吹き飛び、周りの机を巻き込みながら勢いよく床に倒れた。
「な、何なんだコイツ⁉　暴走した大人、なの……か？」
「イヤだ……死んじゃった、の？」
倒れて痙攣する不気味な男を呆然と見つめる上田とマリ。
「正当防衛……だよな」
マリの足にしがみついたままの石田は床に転がる男と上田のバットを交互に見た。
その石田のシャツの襟を上田は後ろからつかむと、グイッと引っ張り、マリから引き離した。
そして、床に尻餅をついた石田に見向きもせず、「来い！」とマリの腕を引いて、後ろのドアへ向かった。
驚いたことに、フルスイングされたにもかかわらず、男は床に手をつき、立ち上がろうともがき苦しんでいる。
「ま、待ってくれ」
男の姿を見た石田は、上田とマリに置いて行かれまいと慌てて飛び起きた。
上田に手を引かれたマリがちらりと教壇付近を見ると、床に倒れた三浦先生の目は瞬きもせずカッと見開かれ、口からは大量の泡を吐き出し、体はピクピクと痙攣していた。
ようやく教室から廊下に飛び出た３人。彼らの目に飛び込んできた光景は壮絶なものだった。
廊下から中庭を挟んで見えるＢ校舎２階の廊下を、青白い顔をした複数の用務員たちが走って逃げる生徒たちを追いかけている。
Ｂ校舎の３階では、教室から雪崩打って出て来る１年生たちを、目が充血して口から泡を吐き出した先生たちと外部の侵入者たちが、教室の中と廊下の両端から挟み撃ちして、次々と襲いかかっているのが見える。
そして４階の窓からは、変異者から逃れようと飛び降りる生徒もいる。
反対側の校舎で繰り広げられている地獄のような光景を前に、マリたち３人は廊下で立ち尽く

していた。
「何なのこれは？　何なのこれはぁぁぁ!?」
「マリ！　気を確かに持て！」
狼狽するマリに、上田が彼女の体を揺さぶり必死で呼びかける。
「みんなは？」
上田の呼びかけで我に変えったマリは、先に避難したはずのクラスメイトを見つけようと、廊下の左右を見渡した。しかし、辺りに人の気配はない。他の生徒たちはとっくに避難してしまったのだろうか？　一番奥のＣ組の教室から掃除用のバケツとともに、騒々しく一組の男女の生徒が転がり出て来ると、そのまま走り去って行った。
そして、ふたたび廊下はマリたち３人だけになった。
「お、おい」
背後から怯えるように呼びかける石田の声に、マリと上田は振り向いた。石田が目配せするほうを見ると、廊下奥の踊り場に、横向きに突っ立っている大柄な男の姿がぼんやり見えた。足元には女教師らしき人物が倒れている。
前方を見つめながら左右にゆらゆら巨体を揺らすその男のシルエットに、マリたちは見覚えがあった。生活指導の大岡先生だ！
「お奉行！」
上田がその名を口ずさむと、大岡先生の体の揺れがピタリと止まった。ゆっくり振り向いた先生の顔は血まみれで、白目のないうつろな目に、顔や腕の血管は異常なほどに隆起していた。
「何かやばいぜ、あれ……」
「そうみたい……」
石田のささやきにマリが答えた直後、突如上田が叫んだ。
「走れぇ！」
３人は大岡先生に背を向け、一斉に廊下を駆け出した。
走りながら振り返った石田が叫んだ。「先生なんか、ものすごく怒ってるぞ！」
大岡先生が口からヨダレと血を垂らしながら、ものすごい勢いで追いかけて来る。まるで獲物めがけて突進する二足歩行の虎だ。
「ロウガをアシルなぁぁぁぁ」
大岡先生の鬼のような怒声が廊下中にこだまする。
「急げ!!」
廊下に転がっていたアルミ製バケツを拾い上げた上田は、マリと石田を先に走らせる。廊下の突き当たりを左に曲がったマリは、そのまま階段を一気に１階まで駆け降りた。
「……」
そこは血の海だった。
最初に侵入した不審者が、それを止めに入った大岡先生たちを襲ったのが１階の玄関前だ。廊下のあちこちで生徒たちが血を流して倒れている。
「おい、しっかりしろよ！」
倒れていた生徒を揺さぶり起こそうとした石田と、無惨な光景を前に立ち尽くすしかないマリの耳に、階段から勢いよく駆け降りて来る足音が聞こえてくる。
「何してるっ！」

バケツを大岡先生に投げつけて時間稼ぎをした上田が階段を飛び降りて現れた。

「上田くん！　は、早く、あそこへ！」

上田に腕を掴まれたマリは、とっさに放送室と書かれた扉を指差した。急いで放送室へ逃げ込んだ３人は、すかさずドアを押さえて息を潜めた……。

「シィー……」

扉に耳を当てた上田が人差し指を口元へあてがう。

キュッ、キュッとせわしなくシューズとウレタン樹脂の廊下が擦れ合う摩擦音が聞こえる。大岡先生が３人を探し回っているようだ。

〝ガチャ、ガッチャ、ドン！〟

突如、扉が激しく揺さぶられた。大岡先生が外から扉をこじ開けようとしている。

３人はドアをこじ開けられまいと、全身を扉に重ねて必死で押さえた。

（お願い先生！　もう止めて！）

マリの願いが通じたのか、やがてドアの外の大岡先生の気配は消えた。

「ふう〜」

３人は安堵のため息とともに、放送室の床へとへたり込んだ。

しばらくして、膝に手を当ててゆっくりと立ち上がった上田は、放送室の中央付近まで歩いて行くと、マリたちの方へ振り返った。

「よぉ、これって何が始まったんだ？」

「まさか、テレビなんかでやってる、〝地球のフォトンベルトの突入時に伴う遺伝子レベルでの人類進化〟ってヤツが、始まったんじゃないの⁉」

おどおどしながらオカルト染みたことを言い始めた石田に、上田はイライラして睨みつけた

「はぁ〜？　じゃあ進化しない俺たちはなんなんだよ⁉　退化かよ？」

「竹中君たちも、フォトンベルトだとか、連中がどうかとか、同じようなこと、言ってたわね……」

マリたち３人が現時点で把握していることといえば、

・軍用機が飛び去ったこと
・男が校内に侵入してから先生たちが豹変したこと
・豹変した変異者は人を襲うこと

の３点だった。

「それにしてもみんな、どこに行ってしまったの？」

今朝の竹中とフジコの会話の内容をぼんやり思い出したマリは、教室を避難してから行方知らずになっているクラスメイトの安否が気になり始めた。

石田も同じ思いなのだろうか。「まさかみんなして、変異か何かして死んだんじゃ……」と石田らしく否定的な表現で気持ちを口にした。

「とにかくだ。ここから出て、誰か助けを呼びに行こう」

そう言って、外の様子をうかがいに放送室の窓際まで歩いて行った上田が、「あ、あぁ……」嗚咽するような声を漏らして震え始めた。

「どうした？」

上田の異変に気づいた石田も窓際へ駆け寄り外を見た。

「ま、マジかよ？」

目にしたのは、学校の正門前に押し寄せている大勢の人の波だった。しかも全員どこか様子がおかしい。中には警察官らしき制服を着た者の姿も確認できる。群衆はかろうじてまだ校内には侵入していないが、それも時間の問題のように思われた。

「一体、何が、起こって、いるの？」

石田に続いて、マリが恐る恐る外の様子をのぞいた時、正門を目指してグラウンド内を走る一組の手をつないだ男女が現れた。上田が独り言のようにつぶやいた。

「あれ、Ｃ組の竹中と木下じゃないか⁉」

竹中とフジコは正門前にたどり着くと、今度は群衆に怯えた様子で、また校舎へ走って引き返し始めた。

そのふたりに校舎内から走り寄る人影が見えた。大岡先生だ！

大岡先生は怒り狂った鬼の形相で、グラウンド中央付近でフジコに飛びかかった。それを見た竹中はフジコを置いて逃げ出すも、反対方向にある裏門を越えてやって来た変異者の群れに襲われて悲鳴を上げた。

「あ〜もう駄目だ……。俺たち、ここで死ぬんだぁ」

絶望の声を上げた石田は、なよなよと、ふたたびへたり込んだ。

「うるせぇ！　死にたきゃ、一人で死ね！　俺にはまだやりたいことがたくさんあるんだ！」

強がりを言って石田を怒鳴ってはみたものの、上田の顔は青ざめていた。

石田と上田が感情をムキ出しにしてくれたことで、マリは自分が意外にも冷静でいることに気づいた。

(なんだろう……？　私、こんな時なのに、戦術を考えてる……)

「でも、どうしてあの気持ち悪い連中はここに集まってくんだよ⁉」

哀れな子羊状態の石田は頭を抱えた。

「そりゃ、ここが災害時の避難場所に指定されてるからじゃねーか？」

冗談ともつかないことを言う上田。

「誰にとっての避難場所なわけ？」

そう、マリは上田に突っ込んだものの、あながちそうなのかもしれないと思った。

「他にここよりも安全な場所はないかな？」

すがるような目つきで、石田が上田とマリに尋ねた。

「安全な場所だあ⁉」

石田を改めて睨みつけた上田をよそに、マリの頭脳が回転し始める。

「屋上、プール、体育館、部室、裏山……」

マリが叫んだ。

「八幡城！」

「八幡城？」石田がマリを見上げて繰り返した。

「学校裏の、城か？」

上田の問いに同意するようにマリは軽く頷いた。上田が続けた。

「あそこなら学校から直接移動できるし、人もあまり来ないか……」

「ええ、そして何より、防戦において、お城に勝るものはないわ」

マリは上田の言葉に、そう付け加えた。

「他のみんなも気になる……。〝アレ〟を使って避難しているみんなに、お城へ向かうよう、伝

えよう！」

シズカやサトミ、明智の顔が脳裏に浮かんだマリは、放送室のマイクへと目を向けた。